

炎

陽

391

1334

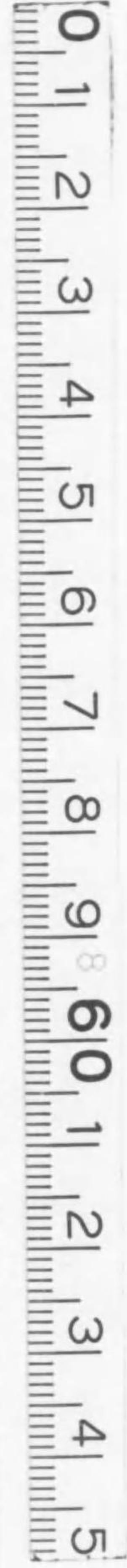
391-1334



1200501460152



川田順箬



始





心華叢書 第八

炎

(改訂本)

川田順著

著者寄贈本

東京竹柏會版



笹川 愼 一 装 釘

陽炎再度の改訂に就いて

五十歳を超えた予は、過去の業績を顧みて、不完全なる著述を訂正しておかねばならぬとの一念が抑へきれなくなつた。「青淵」以降の歌集にはその必要が無いけれども、「陽炎」「伎藝天」「山海經」の三種だけは是非完全なものに訂正しておかねばと考へて、昨年末頃からその仕事に没頭した。さうして、「山海經」は本年二月既にその新版を刊行した次第である。

「陽炎」及び「伎藝天」の改訂は、明治三十年から大正六年に亘る、甚だ舊くして而かも長い年月の間の所産を再檢せねばならぬのだから

ら、容易な業ではない。乍併予は克明にそれを遂行した。創刊以來の心之華を全部通覽した。竹柏園集第一編、同第二編、あけぼの、玉琴等の選集も見返した。加之、城北中學校友會雜誌、いささ川、やまとにしき、玉川集の類まであさり盡くした。さうして、此の凡二十年間の制作中から可成的多數をと心がけて結局採り上げた歌九百首餘を、作年別に整理した上、明治四十年すなはち予二十六歳の時を分界にして、二種の歌集にふり分けた。かくして、初版の「陽炎」及び「伎藝天」は各その名のみを留めて、體裁は殆ど別個のものに出來上つた。

大正十年一月に初版、昭和四年十二月に改訂本を發行した予の第一歌集「陽炎」は、今回再度の改訂によつて、歌數四百三十五首となり、

排列は明治三十年乃至同四十年、十一年間の制作年次に従つた。少青年時代の予の全貌が、こゝに初めて、如實に再現せられたわけである。

明治三十年代といへば、短歌革新の火の手を擧げ且つ殆どそれを爲し遂げた時代で、和歌史上の光榮ある一時期なることは云ふまでもない。この時代の代表的作物として佐佐木信綱先生に「思草」あり、正岡子規居士に「竹の里歌」あり、與謝野晶子女史に「みだれ髪」「舞姫」があつた。服部躬治氏の「迦具土」金子薫園氏の「片われ月」窪田空穂氏の「まひる野」、尾上柴舟氏の「靜夜」なども同じく此の時代の收穫として永久に記念せらるべきものである。歌壇の新人達が、今

日これ等の歌集を繙いて、過ぎ去つた時代の意味を考察する場合に
予の此の舊作集にも手を觸れてくれることがあつたならば、予にと
つて無上の喜びである。

昭和十年四月

川 田 順

陽 炎 目 次

明治三十年	
四季(六首).....	五頁
明治三十一年	
四季(十二首).....	二
雜(八首).....	六
明治三十二年	
四季(十二首).....	一五
旅(八首).....	三

雜 (十九首) 三

明治三十三年

四季 (九首) 四

戀 (十四首) 五

雜 (八首) 六

旅 (十六首) 六

明治三十四年

四季 (七首) 七

戀 (十三首) 八

雜 (十二首) 九

明治三十五年

雜 (八首) 九

明治三十六年

旅 (二十九首) 一〇

雜 (八首) 一三

明治三十七年

雜 (十六首) 一六

明治三十八年

或る少女に (二十首) 一四

戀 (二十八首) 一五

四季(八首)……………一六七

旅(二十八首)……………一七二

雜(二十六首)……………一八七

明治三十九年

紅淚集その一(二十三首)……………二〇三

戀(九首)……………二二五

孤兒哀歌(八首)……………二三〇

雜(十首)……………二三五

旅(六首)……………二三二

四季(七首)……………二三五

明治四十年

雜(八首)……………二四二

紅淚集 其二(三十九首)……………二四六

近畿歌鈔(十首)……………二六六

か
げ
ろ
ふ

川
田
順

明治三十年



のあたりなるらむ

吉野山ひら
ひら深く霞めるや大みささぎ

季

雁がねのきこゆる空を見上ぐればさ霧に
残る有明の月

かつ隠れかつ顯はれて朝霧のただよふ空
をわたる雁がね

夜もすがら吾が吹く笛を久方の空ゆく月
やひとり聽くらむ

葦草つみにし野べのあともなし枯れ伏す
尾花霜しろくして

さびしさのこれより奥やいかならむ踏み
し跡なき雪のほそみち

明治三十一年

四季

夢に見し人もやわれを偲ぶらむさめし枕
に梅かをるなり

遙かなる野寺の鐘も聞くばかり雨しづかなる春の夜半かな

なつかしき妹があたりの小松原過ぎぞわづらふ朧夜にして

歌そへて妹におくりしそのかみの春なつかしき山吹の花

嵯峨のやま大宮人の來まさねばかひもなしとて花のちるらむ

昔見し萩の古枝の花咲きてぬしなき宿に
秋は來にけり

夕ぐれの秋にも堪へし涙かなこころなき
こそうれしかりけれ

ねざめして萩の音きく秋の夜は夕ぐれよ
りも悲しかりけり

秋ふかき外山のおくの小夜砧今年も去年
の人やうつらむ

山ざとのあかつき深きむら時雨おなじね
ざめにたれか聞くらむ

おりたちて庭の落葉をはらひけりさりと
て人もとはぬものから

旅人のゆく影さびし月冴ゆる枯生の野べ
の道のひとすぢ

雑

文綱君七夜の祝に竹柏園大人に奉る、一首

生ひ出でし小松の千代に引きそへて男山
とも聞くがうれしさ

夜もすがら磯山松をふく風のたえまにひ
びく岸のしら浪

大木曾の木曾の山川けふ見れば雲のなか
行くながれなりけり

大和吉野郡大瀧にて一首

夕されば瀬の音さむけし
み吉野の大川の
べの秋のはつ風

大瀧のひびきばかりになり
にけり那智の
み山の深き夜の月

あかつきの鐘の音寒したら
ちねのみ墓の
上に霜やおくらむ

蔭たのむははその梢
老いにけり寒きあら
しの吹かずもあらなむ

別れつる野中の岡の松が枝をかへりみつ
つや君の行くらむ

明治三十二年

四
季

草の上に笛投げおきて牛飼のわらべ眠れ
り春の夕ぐれ

新らしき若葉さしそふ夏山に老のうぐひ
すいつまでか啼く

里人の鮎釣るころになりにけり紅葉なが
れし保津川の水

折りに來む少女は病みて吾が庭に咲ける
うばらの花の露けき

人の世のなさけはつらしわが戀はきよき
小百合の花に語らむ

人とはぬ夏野の小百合、少女子のちひさき
塚を守りてぞ咲く

はたた神ふみとごろかす足もとにむら雲
くづれ山裂けむとす

水あれて家ながれたるこの秋の砧さびし
き川づらのさと

石佛ひとりまします洞のおくにこほろぎ
鳴きて寒き風ふく

小倉山君が御幸のあとふりてむなしき水
に紅葉ちるなり

しぐれゆくゆふべの雲に雁なきて思ふこ
と多き秋のくれかな

み吉野は花の山ともおもほえず櫻が枝の
こがらしの風

旅

江の島

相摸の海あらし浪風こころせよこの島守
は女神なりけり

稚児が淵

浪きよく岩おもしろしみやしろを離れて
ここに神やますらむ

竹柏園大人に随ひて馬入川に舟遊びしける時二首

せきれいのながれ横ざる影の間に渦まく
淵を船のすぎゆく

名もしらぬ小鳥こゑして川ぐまの笹が根
洗ふ水のさやけさ

大山を松の並木の上に見て道者と語りゆ
く野みちかな

道づれの女のやまひいたはりて清水のも
とにくらす野路かな

利根川の岸の高萱うらがれて長き橋のう
へ人かげもなし



ふみわくる岩根のみすすうら枯れて小木
曾の秋は嵐なりけり

雑

多摩川のほとりに竹柏園野遊會を催しける時八首

川原風のどけき春の田舎家にうぐひす啼
かすにはとりの鳴く

よめな摘みて岸田のあせを歸る子はかの
わらぶきや栖處すまかなるらむ

行く川の姿は繪にも描かるべしこの水の
音をいかで寫さむ

やぶれたる蛇籠のもとに生ひ出でし磧の
堇つむ人のなきよ

われら乗りて遊びし筏その材まもて誰が家
居をか建てむとすらむ

かぎりなき廣野の原を流れけりただひと
すちの水のしら浪

武藏野を打見おろして雲の上にはひとりま
すらむ大山の神

老いて後樂しかりし日を思ひ出せば今日
やその日の一日なるらむ

ちちこ草ははこ草枯れし冬の野のみなし
こ草のわが身なりけり

明治二十九年一月、父の病あつかりし時、東宮より盆栽の松と梅とを
賜はりぬ、恩露松、惠風梅と名づく、今年又その梅の花を見て一首

賜はりし御鉢みはちの梅の咲くみればわかれし
春に又なりにけり

二股の榎の木のうちろ線香の煙くゆりて
繪馬古びたり

消えはてぬ煙なびきて焼跡をわたる朝け
の風の寒けさ

焼跡にひとつたちたる假小屋のどもし火
ほそし夜半の秋風

くすり煮ていまはの人にすすめつるその
夜こひしき秋の雨かな

ありし世に泣きつくしぬと思へごもいか
に残りし涙なるらむ

吾が誠かはらぬものをいつよりか君は情
を惜しみそめけむ

人知れぬ涙のうちにこの春も咲きて散り
けり山吹の花

戀ひらるる身は苦しみもあらかしいか
でか君のやつれたるらむ

嶋山の荒磯あらいそに君をおかずとも悲しかるべ
き別れならずや

明治三十三年

四 季

仕へてし殿の昔を戀ひ居ればおぼろ月夜
にしろき梅ちる

こぼれては蝴蝶となりて舞ひ去りぬ神の
み園の山吹の花

山松の蔭ゆく駒のたてがみにふれてみだ
るるしら藤の花

夕づく日たえだえうつる藪蔭のをぐらき
水に秋風ぞ吹く

わがせこの船出を送る秋の夜に入江さび
しく時雨ふりきぬ

百舌の啼くせごの竹垣うらがれて風に吹
かるる烏瓜かな

しもがれて卒塔婆三つ四つあらはれぬ川
の中洲の葦のむら立

昨日見し小草の花のあとふみて寒き枯野
をひとり行くかな

日は落ちてこがらしすさぶ山陰の枯木の
林星ぞきらめく

戀

忘れなばうきもつらきもなかるべしわが
誠こそ悲しかりけれ

いささかの怨も言はでむしろわれ君があ
たりを去らむとぞ思ふ

こひしとてうしとて落つる涙かなただ泣
くためのわが世なるらむ

君が墓におふる夏草ふかくとも人に刈ら
せじわれはらひてむ

おぼつかな慰められてなかなかにまざる
や何のうらみなるらむ

君によりわが戀ひ死なばわが塚の上に咲
くべきしろすみれかな

かもめ飛ぶ磯の松原ここにして君とかた
りぬ君とわかれぬ

後の世はわれ少女子に生まれなむ思はれ
てのみ世を過ぐすべく

思はるるおもひになれてうき人のただ大
方にわれを見るらむ

つらきかな唯大方の情もてこのまごころ
に報いなむとや

君もわれもとはに若くてさゆり葉の花さ
く野べに百世へてしが

怨みわび絶えば絶えねと書きしかごまこ
と離^かれなばわれいかにせむ

かりそめにありし情もうかりしも忘れ
ぬをや戀といふらむ

忘れぬほだしとなりし一言や情に似た
るつらさなりけむ

雑

かすかなる神の御聲の心地して木かげに
ひびく水の音かな

うち笑みて鏡に向ふみどり兒はおのが影
とも知らずやあるらむ

とても吹く浪風ならば荒れに荒れてただ
一舟も残さざらなむ

今にして思へばくやし少女子の名をだに
なごかたづねざりけむ

小机につく頬杖の倒れてはおごろかれぬ
るうすねむりかな

あら海のはなれ小嶋に傍ぎゆきて舟こぼ
ちてむ世には歸らじ

あらし吹く松の一枝の折れながら折れも
はてぬがあはれなるかな

燃え盡きて雪に埋るる火の山の冷えもは
てぬるわがおもひかな

旅

大利根の川のみなかみ春たけてゆつ岩む
らに藤の花咲く

森見えて萱葺見えて畑中をゆく人見えて
夜はあけにけり

山もとにひとすぢ下りしうす霧の野にひ
ろがりて日はくれにけり

廣野とぶ鳥のひとむら雲に消えてもの音
もなしもの影もなし

鳥居入りて松のむらだち杉林みやしろま
での遠くもあるかな

人は皆ぬれて立ちにし旅籠屋のあしたの
雨に栗の花ちる

70

菅笠をうしろに負ひて小林の朝かげわく
る二人づれかな

鹽原にて四首

家のかす十にも足らぬ山ざとのあけがた
さびしにはとりの聲

山道の今年ひらけて去年よりもまれにな
りぬる鹿の聲かな

71

しづかなる山の谷間をゆくほごは水のこ
ころも神代なるらむ

霧こめて暗き山路の秋の雨いつより降り
ていつ止みにけむ

鹽釜浦一首

いり海はしづかに暮れて外海の浪の音と
ほき夕月夜かな

波あれて白き霧けふるありそべの岩より
岩にとぶ鷗かな

しら浪のよせてはかへす岩の上につり
うつらぬ月の影かな

灰いろにうす墨いろに墨色に雲のいろか
はり浪立ちさわぐ

浪の音もふけしづまりて天地は聲なき闇
になりけるかな



明治三十四年

四
季

眉しろき老人多しこの里は梅の花さく山
かげにして

花かげのねむり冷たき少女塚うぐひす啼
きてとふ人もなし

なかなかに松の大木の影落ちて月夜をぐ
らき庭の面かな

廣き家に人少くてむらさめのふる夜さび
しき秋のくれかな

月にふむ大川のべの堤みち虫のみ鳴きて
あふ人もなし

わたましの物つみ車ぬれはてて片町寒く
ふる時雨かな

川ぞひの茅原あし原しもがれて廣きなが
れに月冴えわたる

戀

おそろしき鬼に追はれて闇のなかに二人
泣きたる夢を見しかな

いかさまに人はいふともかかる事かの君
のみはあらしとぞ思ふ

よき嶋を尋ねえずしていたづらに二人の
船よくちか果つらむ

あへば恨みあはねば慕ふわれながらいづ
れまことの心なるらむ

はづかしくこひしくつらく怨めしくかは
りもてゆくわが心かな

何事も言はで袖噛む少女子の朝髪の上に
藤のはな散る

そのかみを忘れぬ君と逢ひ見むはあまり
やさしき今の吾が身か

言よくて誠すくなき人ゆるに年の四年を
すぐしつるはや

吾が思ふ人を戀ふなるいもうどのおなじ
迷ひをいかに諫めむ

一言の情を聞きてわが戀のなれりと早く
おもひけるかな

いかでかく君に怨の残るらむ昨日のうさ
は昨日嘆きぬ

りぼんもて君が結びし草の花花はいろあ
せてりぼん残れり

君とわれ命をかけてわたりつる谷のまろ
橋くちやしぬらむ

雑

嫡母の失せける時

父の墓のかたへの小松刈りすてて今宵母
をも葬りつるはや

いとけなきいもうと連れて父の墓に詣づ
る道を時雨ふるなり

竹馬にのりて渡りしふるさとの小川はい
とどあせやしぬらむ

甲府途上二首

心あへる三人四人と葡萄植ゑてこの山國
にわが世すぐさむ

旅衣春の朝雨にそぼぬれて笛吹川をわた
りけるかな

くれわたる大野に立ちて大川の水のゆく
へをひとり見るかな

さきに行く物影見えて稻妻のきらめく野
路のおそろしきかな

天つ神のみ末は人となりにけり人の子孫
に何か出づらむ

ここかしこ焼き拂はれしあと見えて人な
き村に秋風ぞ吹く

家を閉ちて四方に散りたる村人の歸りこ
ぬまに秋暮れむとす

おろかなる悔の千度の涙かな泣きて消ゆ
べき罪ならなくに

吉野の奥を憶ひて

ま萩さくその川上をおもふ夜の夢に流る
る水の音かな

明治三十五年

雑

空の星と海の真珠とわが胸の底のおもひ
といづれ清けむ

細紐に足くくられし山雀の君に飼はれて
野をも思はず

しづかなる月の光に満たされて波のここ
ろのなごさわぐらむ

狼のこゑにおそれし牧人の羊を捨ててい
づちいにけむ

谷川の底つ岩根にわきかへる熱き泉はた
れか知るらむ

暗き森のふくろふの巢や吾が心ゆきて寝
るべき處なるらむ

泣きつくし怒りつくして吾が胸の霽れむ
ゆふべを山に入らむか

枯生わけ焼石ふめば死の神にともなはれ
ゆく心地こそすれ

明治三十六年

旅

大阪の博覧會見がてら關西に遊ぶ、紀州灘

船のうちにはとり鳴きて曙の光ぞ躍る
灘のあら波

明石にて一首

酔ひ臥せる友を残してただ一人淡路にわ
たる夕月夜かな

藤の花こぼるる雨に一人濡れぬ春はたそ
がれ清瀧の道

宇治寺の早き戸ざしをうらみつつ歸る川
べの春の夜の月

甲州に遊びて

養蠶こがひの村鮎あせつる川瀬葡萄畑夏おもしろし
甲斐の山みち

野ばら咲く岸根離れて山川の荒瀬のうへ
を飛ぶ蝴蝶かな

馬の背にさ蠅むらがり旅人に童あつまる
はたごやの門

風立たば空にひびかむ山松の梢こゑなき
夕づく日かな

そばだちておそろしげなる甲斐が嶺に争
ひ立てる雲の峯かも

疲れたる足さしのべて葡萄噛みて山の月
みる黄昏のやど

はした女の涼み話のわらひ聲夜ふけてひ
びく旅の枕に

吉田口、浅間神社

雪おろし千年やここにすさびけむ不二の
裾野の杉のむら立

河口湖

むら山の青葉若葉につつまれてひとつ緑
のみづうみの色

道づれの別れて乗りしわたし舟木間より
見つつ行く山路かな

精進湖

蔭くらき青木が原をゆきゆきて晝の月み
る湖ぞひの道

水の輪のやがて静かに消え去りぬ松の實
おちし青淵の上

山中湖畔の丘を攀ぢて

荒草の花さく丘に國見して十年あひみぬ
人をしぞ思ふ

桂川の水源にて

しづかなるこの湖をあふれ出でていづこ
に水のたぎち行くらむ

みづうみに残れる水の安けさを罵る聲か

山川の波

此方彼方手もとりつべき川岸の聲も及ば
ずやがてなりなむ

碓氷峠にて、六首

碓氷嶺の熊の平の闇のなかに夜汽車とま
りてももの音もなし

熊の兒に餅投げやりて紅葉ほめて峠の茶
屋に一人やすらふ

舞妓まひぢの舞のくづれのこちして一谷あか
く散る紅葉かな

水も空も雲も高嶺も暮れにけりわが道む
なし秋の夕風

袖につく草の實かなし人もわれも思ひす
てたる谷かげにして

都にははやすたりつるはやり唄うたふ聲
あり山かげにして

淺間山のふもと二首

空たかく吾が身つかみて火の山のま洞に
おとす鳥もあらぬか

大空に燃えけむ石の地に落ちて千年冷た
し秋の霜おく

秋祭にぎはふ村をあとにして夕闇たどる
畑の中みち

雜

天地をしばし飾りし虹消えて闇こそせま
れ夕ぐれのそら

夢を追ひて地獄の門へと走るわれを呼ば
ふがごとしいもうこの聲

生命より光明よりけになつかしき闇の彼
方の微かなる聲

微かにも聲は聞きながら到り得ぬ谷間の
瀧よいつこなるらむ

夏くらす海べの町の借家の小庭うづむる
あぢさゐの花

心知らぬ人と酔はむよりむしろわれ猿酒
のみて猿と舞はむかな

星と星ひかり離れてしたします黒く澄み
たる冬の夜の空

小山内薫、武林無想庵、高瀬精太等と雑誌「七人」を刊行
せんとして

あらし何ぞ誠をこめて吹く笛のかすかな
れども何かまがはむ

明治三十七年

雑

日露開戦直前

御艦皆ふなよそひして時待てる佐世保の
海の冬の夜の月

醉へや君こころの春を數へ見ば十年はあ
らじ人のいのちの

青淵は深きうれひに音もなし散りかかる
花の春も知らでや

さげ髪はわが好む髪二十^{はたち}まで君にふさは
むわが好む髪

どこしへに昨日の罪のしるされて今日の
誠も捨てらるる世や

大空に燃ゆる火の山今裂けて身を埋むと
も心残らじ

心知らぬ千人のそしり何ならず君が一言
悲しとぞおもふ

冷やかに笑みて聴きつる一言の誠知りえ
てそぞろ悲しき

さびしさに強ひて冷たき心持てばいよよ
さびしくならむとすらむ

人知れず心にちぎるひき一曲たしの十年成らずし
て緒琴朽ちなむ

行きあひし三つの山駕籠一つにはつみあ
ふれたる秋草の花

風はさけび鳥はうらむる秋の空にわが悲
しびのなきが悲しさ

いにしへのおのづからなる世に歸り牛追
ふ群に入らば安けむ

酒造る町の並藏かがやきて春の日低し菜
の花のみち

あら波にくるめく眼まなこめぐらせば岩が根椿
しづかなる花

水よ石よ十日のちぎりはかなくて雨に別
るる鹽原の山

明治三十八年

或る少女に

二月きさらぎのついたち月に梅を折りて君が生ま
れしその夜偲ばむ

君やたれ初めて聴きし聲ならずそよ前まきの
世のおぼろ月夜に

前まきの世の花の木かげに一目見て別れし人
よ君かあらぬか

世をかへてあらたに君を戀ひむ日もおな
じ聲もてうたへ鶯

後の世を頼むもはかなかか
る人かか
る花
蔭なくばいかにせむ

後の世もかかる木かげに君待たむ來ませ
この世のおもがはりせで

靈たまにそふこの世のかたみもしあらば君が
おもかげ鶯のこゑ

忘れぬ昨日のうらみ忘れて人見まほ
しき春の夕風

ゆく春のうらみに堪へぬゆふべなり笛ふ
ところに君をたづねむ

花かげに笛ふきやめてうかがへば君かあ
らぬかおぼろ夜の月

146

君やたれ神か少女かまごはれつこの世に
似ざる花蔭にして

十七の春のわかれや惜しからぬ花の吹雪
に笑みて立つ君

花よ散れ彌生二十日の花よ散れいとし藤
子が黒髪の上に

147

ちる花に二人をつつむ春風よかくてみ空
にさそひ去らなむ

歸る家は千里のをちの心地して君と花ふ
むおぼろ夜のみち

この心ゆめいつはりはなきものを春來て
花の咲かむかぎりは

遠音なく深山うぐひす君を見む夢のはや
しにしるべするごと

君追ひて迷ひ入りぬるまぼろしの森うつ
くしき白藤の花

おぼろ富士みまもる君がうるはしの瞳に
うつる海の濃緑

さらば君この潮の音を身にしめてかかる
渚に後も生まれむ

戀

雛まつりこの春さびしたらちねの母のお
もひに君こもります

君悲し花の眞袖もぬぎかへて飾らぬ髪に
春かせぞ吹く

心にもあらで嫁ぎしこの春の花ちる雨を
病みて聴くかな

その春の少女姿にたちかへり花の蔭ふむ
君を夢みし

人一人いのちにかへて思ふ事君は見るら
し花草のごと

もの言はず運命さだめの前にひれふしてやすく
も人のそむきけるかな

たやすくも捨てつと人や怨みなむこの夕
ぐれの心知らずて

見まもれば君が姿となり
にけり夢路の谷
の姫百合の花

156

けふ三年人の誠をよそに見ていまはのゆ
ふべ何か泣くらむ

かくて今海山とほく去りゆかば君を怨む
と見えむ悲しさ

さ緑の野山ことごと泣き枯らし人を怨み
む世をも呪はむ

157

身にしみて御聲悲しくおぼえつるかの朧
夜やかぎりなりけむ

花見れば大倭^{やまと}八十國春なれどわられたださ
びし君なしにして

おなじ恨みおなじ嘆きの世を過ぎむ十年
二十年はなればなれに

名も捨てて望も曲げてえし戀の十年の後
の悔をしぞ思ふ

ぬばたまの地獄の焰も天の火も焼き亡ば
さむ戀にあらなくに

咲きて散る花の一夜はさらに言はじ戀の
いのちのあまり短き

世の常の戀とは言はじみなし兒に神の賜
ひし母と思はむ

うき戀の四年に髪はさみだれて秀れし才
もすさみけるかな

心さへ身さへ捧げし人をおきていかなる
幸か君求むらむ

道きりし小蛇におちてえも行かぬ人うつ
くしき白旗の山

名の榮^はえも富の力もしばらくは心に消え
てただ君思ふ

浪狂ふいはほに立ちてこの戀の運命^{さだめ}告げ
よと泣きて祈るかな

誠なき胸より出づる罪とがを運命さだめの神に
おほせずもがな

君ゆくも死なじのちかひ忘れつあまり
悲しき夕雲のいろ

秋はただわが墓めぐりひびかなむ君が好
みし鈴虫の聲

戀ひわびて失せし神代のいらつ女も聴き
けむ聲か鶯のこゑ

遠つ嶋に二人いなむと言ひし人おもひぞ
出づるうき秋にして

四 季

羽根とると枝うちたたたく羽子板のぬしう
つくしき紅梅の花

鍬の柄に蝴蝶とまりて人もなし陽炎もゆる
春の山畑

鶏を呼ぶ少女がこゑのらうたさに見入る
垣の山吹の花

風越ゆる麥生のはての雲の峯に夕日くづ
れて人影もなし

はちす咲く妹が垣根のかたつむりもし夢
あらば何夢むらむ

星まつりやさしき唄を聞きしかな夕浪さ
わぐ嶋かげにして

星を仰ぐゆふべのおもひ秋澄みて空に聲
なき天の川浪

谷ふかきすみかに歸る山賊やまだちの松の火に照
る蔦紅葉かな

旅

葛西が谷一首

高時の墓とぶらひてゆくりなくよき梅見
たり鎌倉の山

不二見ゆと君を招きぬ梅折りにふと登り
たる磯山の上

小田原在早川の海岸にて二首

足柄や箱根おろしの海吹けばけぶり晴れ
ゆく大嶋の山

囚人らつながれながら石はこぶ河原の道
のひるがほの花

石切場一首

なでしこのむれ咲く岩をあらけなく槌も
てくづす石橋の山

身を捨てばかかる淵にと君笑みぬ真萩ち
り浮く早川の水

秋山の木かげ岩かげ露ふみて夕日の湖に
出でにけるかな

鶯に谷間のゆふ日ながめやる横顔さむし
駕籠のなかの人

安房北條にて二首

海越しの不二むらさきにくれそめて百千
の白帆夕日かがやく

わが舟を沖の小舟に撈ぎよせて鱸あがな
ふ秋の夕ばえ

清澄山

山さむき二十日の月にひびくなりふもと
の海の荒浪のこゑ

碓氷四里紅葉を染めて毛の國の稻葉にわ
たる夕づく日かな

秋ふかみ湯の宿閉ちて人もなし紅葉みだ
るる霧積の山

養老山二首

多度の山夕日も花もとごまらずゆく春い
そぐ瀧のひびきに

尾張美濃一つに續く菜の花に夕日かぎろ
ひ今日の日暮れぬ

笠置山夜討が攀ちしからめ手の岩かげ寒
き蔦紅葉かな

後師三首

山清き紀の川上の青ふちにうぐひす聴き
て後編むかな

西川のお花よいざ來^こ夏^{なつ}實^みまでのせてくだ
さむ山吹の溪

綸^い垂^りる岩垣淵に影みえてうき人お花も
の言はず行く

岳麓湖上を憶ふ、九首

夢遠し神のみ岳のふもと村みづうみ清き
初秋にして

歛すてて箴せきの手やめて皆仰げ神の御岳に
虹あらはれぬ

人の世の榮えは言はじうらやまじ虹うつ
くしき湖ぞひの村

蚊帳を出でておばしまに倚る旅やかたみ
づうみ白し有明の月

いちごみのり眞萩花さく渚みち二里来て
やどる黄昏の村

ましら啼く岸のむら山そばだちてみづう
み暗き夕づく日かな

鮒つりてかへる湖への眞萩原ゆふ日の富
士となりにけるかな

きつね啼く聲肌さむみ夜涼みの舟撈ぎか
へす片われの月